



NPO法人 大谷石研究会

大谷石の魅力を全国のみなさんへお伝えする大谷石研究会の広報誌

[哲学の庭]から道具小屋方向を望む



(写真: 乾 剛)

レベル調査時の集合写真



道具小屋



アトリエ内部



学生寮・図書室外観



(写真: 乾 剛)

同ギャラリーは、年2回の企画展期間に公開されています。詳しくはHPでご確認ください。

益子町の中心部、城内坂からほど近い丘陵地に、ハンガリー出身の彫刻家が築いた、創作と暮らし、作品展示のためのランプスケープが広がります。フナーナンドール氏(1922-1997)は、第二次世界大戦後のハンガリー動乱の中心人物として追われ、スウェーデンに亡命、そこで出会った秋山千代氏と共に1969年に来日し、1970年より益子に住居とアトリエを構え生涯同地にて創作活動を行った芸術家です。現在、ワグナー・ナンドール アートギャラリーと名付けられた庭園には、移住当初から晩年までに築かれたナンドール氏の設計と夫妻のセルフビルによる建築群が点在し、鉄骨造のアトリエ、大谷石の特な積石造の図書館展示室など、地形に富んだ環境の中で互いに、また屋外の彫刻作品と有機的に関係づいた文化的景観が形成されています。氏の建築的な表現活動が集約されたこの環境には、創作活動と並行した長期間にわたるひとりの芸術家の環境形成の足跡に加えて、個々の建物における独自性の高い構法や空間構成などの特徴を見ることができます。

・建物レベル調査 (4月22日)
傾斜地である敷地と建物の位置関係を把握するために、測量士である研究会理事の佐藤統氏の指導の下、建物のレベル調査を行いました。約8mの高低差がある北向きの斜面全体におよそ13棟の建物が複合して点在する状況を確認しました。

そこで、大谷石研究会と宇都宮大学遠藤研究室は、同ギャラリーを運営する(公財)ワグナー・ナンドール記念財団の「理解いただき、2023年度に予備調査2024年度より建物群の調査、および建築図面、ドローイング、写真等の建築資料に関する合意調査を開始し、継続的に活動を行っています。また現在、財団には氏が残した断片的な建築資料が保管されているものの、個々の建築図面が完備されていないため、調査から建物図面を作成し、今後の環境整備における基礎資料として活用されることも想定しています。

2024年度は、建物のレベル調査、3棟の実測調査を実施しました。ここまでの調査の経過の一部を中間報告として以下に述べさせていただきます。

・囲炉裏小屋・道具小屋実測調査(5月29日)
囲炉裏小屋と道具小屋は、東西に長い敷地南側の道路境界付近、北向きに傾斜した庭園を見下ろす場所に位置する木造の簡易な建物です。1970年を起点とする建築群の中では後期にあたる1990年代前半期の建設と推定されます。囲炉裏小屋は竹林に併む10m足らずの慎まやかな建物。対して道具小屋は、東西にセパレートした2・4m四方の小さな内部空間と、その中間に4スパン9・6mの屋外土間スペースを有し、その道路側には彫刻作品(モーゼ)が屹立するが如く置かれ堂々とした構えを見せます。この道路境界には門扉の形跡が見られるところから、宛ら来訪者を招き入れる長屋門的な性格が意図されたものかも知れません。また、共通する特徴として、フランジャーの柱脚金物が打ち込まれた円筒形状の独立基礎、軽量な木材による鉄み梁構法といった、自らの施工が考慮された合理性の高い構法が確認されました。

ワグナー・ナンドールアートギャラリー調査報告

・アトリエ棟実測調査(11月21日)
敷地西側の入り口近くには、主に

1970年代に建設された初期の建物群が、体の環境構築の基点として、特に重要な建築といえます。北斜面に直行して鉄骨造の建物が置かれ、内部中央の大空間(約8m四方、高さ約7m)には、北側上部の大開口(ブロフィリット、ガラス)から柔らかく均質な光が降り注ぐ、創作のための安定した室内環境が実現されています。また南北に組み込まれた2層の居室部と共に、全体として斜面に沿ったスキップフロアの構成となっており、施工性と経済性、環境との調和が図られた合理的なデザインの特徴が捉えられました。

今回調査を行った建物の他にも、ギャラリーには、大谷石を用いた構法、氏の創作との関わりを示唆する意匠が特徴的な建物等が、彫刻、自然と融合した環境を形成しています。今後も引き続き調査を進め、改めて報告の機会を持てれば幸いに思います。